

マタイ福音書講話（7）

マタイ 4章 1～11節【誘惑を受ける】

1節「イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒野に行かれた」（マタイ 4：1）「イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒野の中を“霊”に引き回され、40日間、悪魔から誘惑を受けられた。」

（ルカ 4：1～2）とあります。昔のイスラエルの民は、紅海を渡り、ただちにカナンの地に入ったのではありませんでした。彼らはシナイの荒野で40年間旅をし、神に訓練されたのです。紅海を渡ることは洗礼の象徴です。荒野の40日間は人生の象徴です。洗礼を受けても人はすぐに天国に、つまり永遠の安息に入るのではなく、生涯にわたって神によって訓練されることを教えています。ここでもイエス様が洗礼を受けて、悪魔の誘惑を受けるために、荒野の中を「“霊”に導かれて」「聖霊に引き回された」と書かれています。悪魔の誘惑を受けさせることは、神の御心であって、それはイエス様を新しいイスラエル（信仰の民）にするためでした。申命記にこう書かれています。「あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知らうとされた。主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」（申命記 8：2～3）

よく「なぜ、私ばかりにこう次々と試練や苦しみがやってくるのだろう」と言われる方がいますが、ここにその理由が書かれています。「主はあなたを苦しめて試し」、「主はあなたを苦しめ、飢えさせ」とありますから、神が苦しみを与え、あえて飢え（生活の不安定）を与えておられるのです。それはあなたを試しているのであって、本当にあなたが神に従うかどうか、神を信じるかどうかを知らうとしているからだということです。罪がなければそのような試練は必要ないでしょう。しかし、罪ある私たちには、不純物を試練によってしか取り去ることができないのではないのでしょうか。

2節「そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹になられた。」

イエス様は四十日間断食した後、「空腹を覚えられた」（マタイ 4：2）とあります。この「空腹」（hungry）というのは人間性をもっとも示す言葉です。40日の後初めて空腹になったという意味ではなく、限界を体験されたという意味です。神は絶対、空腹を覚えません。神はすべてに満ち満ちておられ、足りないということはないからです。でもそんな神様が肉体を取られて、人間の弱さと

限界を、身をもって知って下さいました。だから私たちのことを分かって下さるのです。この40日間の試練の時は、苦しみと同時に神を最も近く体験する時でした。人が悪魔にもっとも近い時、実は人は神にもっとも近いのだということを知りましょう。聖書の中にも「その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」(マルコ1:13)とも書かれています。また詩編にも「苦難の時、必ずそこにいまして助けて下さる。」(詩編46:2)、「苦難の襲うとき、わたしが呼び求めればあなたは必ず答えて下さるでしょう。」(詩編86:7)、「苦難の襲うとき、彼と共にいて助け、彼に名誉を与えよう。」(詩編91:15)と書かれています。試練というものの見方を変えるのです。試練は試練だけでやってきません。悪魔もあなたの近くにやってきますが、神はもっとあなたの近くに来ておられるのです。それを知って勇気を出し、神に出会う時としましょう。

3節「すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。」

ここで悪魔は、イエス様に三つの誘惑をしますが、それは創世記にでてくるエデンの園で「善悪知識の木」がアダムとエヴァを誘惑した三つの誘惑と共通しています。「その木はいかにもおいしそうで、目をひきつけ、賢くなるように唆していた」(創世記3:6)とあります。これは別の箇所では「肉の欲、目の欲、生活のおごり」(1ヨハネ2:16)とも言い換えられています。キリストがこのアダムと同じ誘惑を受けたことは、彼が人間と同じものになった、人間と完全に連帯されたことのしるしです。

●2世紀のリヨンのエイレナイオスはこう言っています。「主は万物を再統合されたとき、私たちの敵に対するあの戦いをも自分のものとして引き受けられ、自らのうちに再統合された。…敵を打ち破った方が、女から生まれた人間でなかったならば、敵が本当に打ち負かされたとは言えなかったであろう。」

エイレナイオスは『再統合』という言葉をよく使いますが、人間のすべての運命、失敗を引き受けて、それを自分の中で再びやり直して癒し、回復するという意味です。ゆえにイエス様のことを第二のアダムといわれるのです。「最初の人アダムは命のある生き物となったと書いてありますが、最後のアダム(イエス)は命を与える霊となったのです。」(1コリント15:46) だからイエス様はここで神として悪魔と戦うのではなく、人間として悪魔と戦われます。なぜなら悪魔に負けたのは神ではなく人間だからです。人間として勝ったのでなければ、本当に悪魔に勝ったとはいえないからです。そこで神の子は全能の力をここでは見せず、第二のアダムとして悪魔に勝たれるのです。それは最初のアダムの不従順を癒し、人間を悪魔に勝つ者にするためでした。「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正し

い者とされるのです。」(ローマ 5:19) というのはそういう意味です。私たちは神に従えないけれども、唯一の従順な方キリストに結ばれることによって、あなたも従ったことになるのです。

3~4 節「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。イエスはお答えになった。人はパンだけで生きるものではない。」

キリストへの悪魔の三つの誘惑は、イエス様の人間性に働きかけ、自分が神の子であることを疑わせようとする(父なる神を疑わせようとする)ものでした。最初、悪魔は空腹なイエス様に石をパンに変えろといひます。しかし主は「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(4 節)といわれます。これは申命記 8:3「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」からの引用です。人間の最大の悩みは「食べていけるか、つまり生きられるか」ということです。仕事をくれる人、食べさせてくれる人を人は大事にします。教会の世界でも同じです。神学校が人事を握り、教会を斡旋します。だから牧師たちは食べてゆくために神学校の人事にへつらい、派閥を守ります。それは日本相撲協会も同じでしょう。「石にパンになるように命じる」とは、奇跡を起こして人々の食糧問題を解決したらメシアになれるぞという誘惑です。

5~7 節「次に悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。神の子なら、飛び降りたらどうだ。神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える、と書いてある。イエスは、あなたの神である主を試してはならない、とも書いてある。」

次に悪魔はイエス様を神殿の屋根の上に立たせ、飛び降りて奇跡を見せろといひます。奇跡を見せればメシアになれるぞというのです。しかも悪魔は聖書から御言葉を引用して誘惑してきます。「主はあなたのために、御使いに命じて、あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。彼らはあなたをその手にのせて運び、足が石に当たらないように守る」(詩編 91:11) という言葉を用いました。しかし主は「主を試してはならない」(7 節)といわれます。これも申命記 6:16 からの引用です。悪魔はこの言葉によってキリストの心に、父である神との関係について疑いを生じさせようとしているのです。

8~10 節「更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えようと言った。すると、イエスは言われた。退け、サタン。あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ、と書いてある。」

最後に悪魔はイエス様を非常に高い山に連れて行き、世の繁栄を一瞬に見せ、悪魔を礼拝するならこれをすべて与えると嘘をいいます。悪魔にできるはずはありません。全世界のものは神のものなのです。悪魔は、悪と妥協し権力と富と地位を得れば、人はお前を尊敬し、お前に従い、お前はメシアになれるぞといったのです。主は「**退け、サタン。あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ**」（10節）といわれます。これも申命記6：13からの引用です。

●6世紀のグレゴリオス1世はこの箇所についてこうっています。「主が悪魔から誘惑された時、聖書の言葉を引用して答えられた。主は御自分の力で、悪魔を奈落の底に沈めることもできたのに、御自分の全能の力を用いようとはせず、聖書の言葉だけを用いられた。」

イエス様がいかに人間としてとどまり続けたかを学びましょう。悪魔はけっしてメシアになることをやめさせようとしたのではなく、栄光のメシアになれと言ったのです。経済問題を解決するメシア（教会）として、奇跡を行うメシア（教会）として、この世の権力を得る政治的なメシア（教会）として人々を救えと悪魔はいうのです。悪魔は何とかして、キリストを「神」にさせたかったのです。エデンの園で悪魔がアダムに「神のようになれる」（創世記3：5）と誘惑したのと同じです。「神の子なら～命じてみろ」「神の子なら～をしてみろ」と悪魔はイエス様に言います。それは十字架の場面でもそうでした。「神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りてこい。」（マタイ27：40）

私は牧師になって29年、いつもこの誘惑を受け続けてきました。今も受けています。教会が奇跡を行い、病気を癒し、苦しむ多くの人々の必要を満たし、立派な聖堂と権威と地位を得れば、人々はキリスト教を信じてくれるだろうと思ってしまいます。大きな教会を見ると羨ましくなるのです。私たちは奇跡や病気の癒しやしるしを求めます。それが与えられれば自分は神の子であり、神が自分を愛していると思ってしまいます。でも、イエス様は御言葉で満足する道を選ばれました。

●4世紀の聖クリュソストモスはこうっています。「この誘惑は、神との和解を求める私たちに対する一つの課題でもありました。私たちは、奇跡によってではなく、忍耐と長い苦しみによって悪魔を克服しなければなりません。そして、空しい見せびらかしのために何も行ってはなりません。」

●イエズス会のホイヴェルス神父は上智大学で教師として働かれていましたが、こんな詩を残しています。
「最上のわざ この世の最上のわざは何か 楽しい心で年をとり 働きたいけ

れども休み しゃべりたいけれども黙り 失望しそうな時に希望し 従順に平静に おのれの十字架をになう」

最上のわざというとか何か大きな功績をあげることや、名誉あることをすることや、みんなから称賛されたり、認められたりすることと考えがちですが、そうではなく僕になるということなのです。

イエス様は一瞬にして食料を山ほど与えることも出来ましたし、奇跡を行うことも、全ての権威も従わせることもお出来になりましたが、イエス様はこの道を退け、ただ僕として神に仕える道を選ばれました。私たちに主は言われます。あなたは神を神として人間にとどまりなさい。神を信じて僕になりなさい。愚か者になりなさい。それが悪魔に勝つ道です。

●かつてこの教会を去った人がこう言っているのを聞きました。「都島教会の人たちは程度が低く、彼らに学ぶことは何もない。それに比べて、Y 教会はすごい。あそこの信者さんは聖徒だ。何をさせてもきちんとできるし、清く、立派な信者だ。」そうやって、その人は教会を去って行きました。最近この Y 教会がカルト化しており、既に弁護士が動いているというニュースが入ってきました。その人はこの悪魔の誘惑に引っかかったのです。

私たちは隣人を、特に主の体である兄弟姉妹を愛しなさいと命じられました。大教会だろうと、小さい教会であろうと、隣人を愛することは同じです。一人の隣人を愛せなければ、どこの教会に行っても同じです。そして、その隣人の中にキリストを見ること、これが私たちに与えられた使命です。一人の隣人を愛するということは至難の業です。一生をかけても愛することはできず、もうこれで十分ということはありません。